

ストップ 肝がん

モンゴル奮闘記

江口有一郎

■ 3 ■

今回、医療支援に訪れたスフバートル県タリガンガ村は、首都ウランバートルから約800キロ。飛行機や鉄道はなく、車で国道をひた走る。国道といってもわだちだらけの土の道であり、四輪駆動のオフロード車を朝から深夜まで運転してたどり着く、まさに辺境の地だ。

放牧されている羊や牛、馬を幾度も避けながら進み、数時間おきに眺めがよい丘を探して休憩を取る。空は360度開け、見渡す限りの大



見渡す限りの大草原で、民族衣装姿で馬に乗る筆者・江口有一郎

見渡す限り大草原、蜃気楼も

草原。ここには真正正銘の「地平線」がある。草原を歩くとハーブの優しい匂いが漂う。運がよければ、オオワシやガゼル、キツネなどに合う。昼下がりに、はるかかなたに街らしい影が見えるが、なんと蜃気楼らしい。

遊牧民が暮らす移動式住居「ゲル」にも立ち寄った。初対面のわれわれを、羊のミルクで作ったミルクティーやバター、乾燥したパンでもてなしてくれた。さすが遊牧民の国。あり合わせのティーや食料を振る舞って旅人と歓談し、長距離の移動をいたわるのだという。

過酷ながらも温かい気分になりながら、出発から15時間がたった午後11時、ようやくタリガンガ村の村医療センター近くの宿泊施設に到着した。水道はなく、当然風呂もシャワーもなし。井戸水を頭からかぶるだけだ。電波がほとんど届かないので携帯電話は使い物にならない。トイレも基本的には自然に向かって用を足す。何もかも大自然の中の生活であった。

食事は3食とも、入院患者も食べている地元料理の賄いをごちそうになる。食べる様子を不安そうに眺めている給仕の女性は、「アムツタイ！（おいしい！）」と声をかけるとほほ笑んでくれる。寝る前には、医療チームがゲルに集まりミーティング。手作りのナッツやチーズをつまみにウオッカをちびり、ちびりと飲みながら、夜は更けていった。（前佐賀大肝疾患センター長・医療法人ロコメディカル副理事長）

毎週月曜掲載

過酷な旅もてなし温かく

